慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福澤諭吉の人間観における負の要素：進化生物学的視点からの一考
Sub Title	
Author	坪川, 達也(Tsubokawa, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の教養学：慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008.) ,p.353- 362
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88455348-00000012-0353

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤諭吉の人間観における負の要素

——進化生物学的視点からの一考——

坪川　達也

Ⅰ　生きている「福澤」
Ⅱ　「ヒト」と「人間」
Ⅲ　進化生物学と人間観
Ⅳ　福澤諭吉の人間観――怨望と惑溺
Ⅴ　最後に

Ⅰ　生きている「福澤」

「福澤は生きている」と表現できるほど、没後150年近く経つ現代においても、その著作、思想は大きな意義を持っている[(1)]。その思想的・社会的影響は、人文科学、社会科学の偉大なる諸先生方の研究により、現在もなお息づいているのである[(2)(3)(4)]。筆者の専門は自然科学の領域、特に社会行動と脳の関連を研究する社会神経科学と[(5)(6)]、サカナからヒトまでの脳およびその産物としての行動の進化を研究する進化生物学である[(7)]。福澤研究については門外漢との謗りを免れないが、門外漢ゆえに、福澤研究の多面的展開の一助となればと思い、ここに拙文を投稿する次第である。

Ⅱ　「ヒト」と「人間」

具体的な考察に入る前にまず、自然科学で扱われる「ヒト」と、人文科学・社会科学で扱われる「人間」の定義の差を明らかにしておきたい。

自然科学においてカタカナで「ヒト」human と書かれる場合、ヒトは動物界脊椎動物門哺乳綱霊長類目ヒト科ヒト属ヒトという動物（ホモ・サピエンス）を意味する。地球上に生命が誕生して以来、命を継ぎ、進化してきた実在の動物種である。この場合、物理、化学、遺伝子（分子生物学）、細胞（細胞生物学）、器官および個体（解剖学、生理学）レベルでの「ヒト」の共通性が強調される。

一方、人文科学、社会科学で表現される「人間」human being は、動物と隔絶した知的能力を持つ主体として理解される。他の動物と隔絶するものが、すなわち、知性と意志である。これを神経科学において定義しようとするなら、それだけで、分厚い本になってしまうほどの議論が必要であるが、今回は、「知性」を事物、社会、言語に対する高い認識能力と、「意志」を「知性」を統合・利用する自己認識能力と簡単に定義をしようと思う。アリストテレスの「人間は生まれながらにして社会的動物である」を引くまでもなく、これら知性と意志と呼ばれる能力の発現には、社会的環境と事物・言語の教育と自己認識の鍛錬という長い期間の相互作用が必要である。この複雑な過

程とさらに複雑な社会機構によって、人間には、他の動物には実現できないほどの、認識、自己意識、行動の幅広い差異が生じる。蛇足だが、human being より「人（ヒト）の間」（among human）と書く日本語の表記の方が自然科学的には的確であると感じる。完全に社会より孤立した「ヒト」の赤ちゃんは、無理に生存させたとしても「ヒト」ではあるが「人間」にはなれない（このことは児童虐待の不幸な例から確認されている。逆にいわゆる野生児の伝説は自然科学においては既に反証されている）。それほどまでに「人間」と「社会」は不可分なのである。

理系＝自然科学の「ヒト」と文系＝人文・社会科学の「人間」は、学問領域を異にして長く共存してきたが、近年、遂にこの二つを橋渡しする科学が発達してきた。ヒトが人間となるために特化した「脳」を研究する神経科学の発達である[8]。神経科学の発達は、まだまだ初歩的なもので人文・社会科学の諸先生をして大いに納得させるほどのものではなく、プロタゴラスのいう「万物の尺度たる人間」に「ヒトの脳」という新しい尺度が取り込まれている最中である。

神経科学の最近の進歩には多くの発見があるが、今回強調しておきたいのは、ヒトの知性と意志は、進化の過程で作られてきた古い神経回路の上に機能しているということである。ヒトの脳で、知性と意志を、つまり「人間としてのヒト」たることを司っているのが発達した大脳皮質である。しかし、ヒトの脳を構成するのは、発達した大脳皮質だけではない。皮質下には、大脳辺縁系（情動）、間脳（欲）、脳幹（反射）といった脊椎動物間で共有され、生存に重要な役割を果たす「動物としてのヒト」を司る部位が存在するのも事実である。神経科学は、進化的に古く単純な生存のために必要な反応を引き出す部分が、ヒトにおいてさえ、その行動に大きな影響を与えているということを明らかにしている。人間の意志に関連する前頭葉の部分では、単に知性を司る皮質の領域においてのみ神経回路を構成しているのではなく、大脳辺縁系（情動）の部分とも密な神経回路の連絡があることが判明している。

これらの機構を機能面から考えると、我々が「意識」といっている「自己認識」部分に至る以前に、感覚から得られた情報は、反射・欲・情動といった「無意識」として処理された上で「意識」に上り、はじめて「知性」によ

って判断が下されるということがいえる。つまり、「知性」で処理されるのは高次な一部分のみということになる。

大脳皮質は構造的に情動を司る部位と回路を共有し、機能的には非知性的無意識の前処理を受けている。このように考えると、「人間的意志・知性」とは、ヒトの脳の「限定合理性」の表象であるとも受け取れる[9]。

Ⅲ　進化生物学と人間観

進化生物学とは、簡単にいえば、進化を事実として捉え、生き残って子孫を残すことができたもののみ、その固有の形質を次代に伝えられる成功者だと評価する考え方である（実際にはもっと複雑であるが）。

進化生物学を論じた代表著作に、ドーキンスの『利己的な遺伝子（Selfish gene）』があるが[10]、この「利己的」という言葉に本来、倫理的意味は付与されない。自己の固有の形質を保存するためには、自己の情報を伝えなければならないという単なる「情報」概念上の性質を言い表した言葉である。これを遺伝子から現存生物一般（もちろん遺伝子を持つ）に適用して、生物個体の目的は生存そのものでなく、生存して次世代に情報を伝える（繁殖する）ことが第一義であり、その様を扇情的に「利己的」と本来の書名『生物――生存機械論』より増補改題したにすぎない。

社会の成立を前提に研究をされている人文・社会科学者の先生方は「利己的」という言葉に反社会的な意味を感じ、反感を感じられるかもしれない。ヒトの生物学的「利己的」傾向を取り込んだ「人間観」は、知性と意志を中心とする「人間観」と比較すると、吐き気を催すほど醜悪な「人間観」に感じられることも想像に難しくない。

しかし、この「利己的」な性向の発見は、ヒトを含む動物の行動、ひいては心理の理解に重要な示唆を与えたということをご理解いただきたい。進化行動学や進化心理学は、ヒトの行動や心理における生物学的傾向としての「利己的」を取り込んだ新たな「人間観」を生み出しているのである[11]。

既に「ヒト」と「人間」の違いで見たように、神経科学の進歩は、意識的な意志と知性の前に無意識が存在することを示しており、無意識は、大脳辺

縁系（情動）、間脳（欲）、脳幹（反射）といった自己の生存と、繁殖に関る領域が司っている機能である。自己保存と子孫を残すための競争は無意識で行われる部分も多いゆえ、自己のそうした部分には気づかずに、他人の行動の中に見て取ることが多いかもしれない。しかし、自分自身も含めたすべてが、無意識的に利己的な傾向を持つという事実をぬきにして、「人間」を正しく理解することはできないのである。動物であれば、受け入れやすいであろう生物としての「利己的」傾向を、「ヒト」にも認め、新たな「人間」観を取り入れることが肝要であると考える。

Ⅳ　福澤諭吉の人間観——怨望と惑溺

筆者は、以上で説明した進化生物学的見方をふまえ、「人間」をより現実的に理解するためには、醜悪であろうとも「ヒト」の生物学的「利己的」傾向も事実として認める必要があると考えている。「脳」という物理的根拠を与えることによって、「人間」という非常に複雑な社会的産物を、より正確に理解することができると思うからである。

福澤諭吉の著作、思想の先進性の源は、彼がより現実に基づいた冷徹な人間観をもっていたからだと解釈している。福澤の人間観の先進性の由来[12][13]、肯定的観点は[14]、諸先生方の先行研究により明らかになっているが、筆者は、福澤の人間観の否定的観点に注目し、筆者の人間観との比較を試みたいと思う。

ここでは、福澤の人間観のうち、負の要素であり、その人自身だけでなく、周囲の進歩をも妨げるとして彼が挙げた「怨望」と「惑溺」[15][16]に注目したい。

最初に『学問のすすめ』十三編「怨望の人間に害あるを論ず」において現れる「怨望」について論じたいと思う[17]。この編では、不徳の多くは相対的なものであるとし、「例えば、銭を好んで飽く事を知らざるを貪稟という。されども銭を好むは人の天性なれば、その天性に従って十分にこれを満足せしめんとするも決して咎むべきに非ず」とある。この文では「銭」と使われているが、これを敷衍して「利益」と解すれば、「人の天性として（自己）

利益を好むと考える」と読み替えることができ、正に著者の考える人間観に一致する。

さらに進むと不善の不善たるもの怨望のみとし、「怨望は働きの陰なるものにて、進んで取ることもなく、他の有様に由って我に不平を抱き、我を顧みずして他人に多を求め、その不平を満足せしむるの術は、我に益するは非ずして他人を損ずるに在り」とし、「怨望」を自己の利己的傾向を省みることなく、他者損失の追及を求める行為としている。さらに、このような行為は「人間の悪事これに由って生ずべからずものなし」と非難し、「公利の費をもって私を逞しうするものというべし」と所属集団全体に損害を与える反集団的な利己的行為であると判定している。

進化生物学的に「怨望」という感情の働きを考えると、所属メンバーが多く（少ないと全体利益の損失が明らかになりやすい）、比較的メンバーの階層が維持されていて、対象が自分と同等未満であれば（階層の逆転がなければ、復讐されにくい）、このように対象の損失を追及することにより、相対的に自己の利益を上げることができるので、そのような行為が生じると説明できる。

福澤の慧眼は、これが「働きの陰なるものにて」と隠された（場合によると無意識に近い）感情によるものと看破している点である。人間の神経科学的特質として、大脳皮質と大脳皮質下があり、意志や知性で判断する前に好悪や感情で物事を判定する仕組みになっているという、近年明らかになってきた事実と見事に合致しているのである。

次に『文明論之概略』などで多用される「惑溺」である。『文明論之概略』巻の一第二章「西洋の文明を目的とすること」の福澤の定義によれば、「惑溺」は「習用の久しき、あるいはその事物に就き、実の効用をば忘れて、ただその物のみを重んじ、（中略）、甚だしきは他の不便利を問わずしてひたすらこれを保護せんとするに至るあり。これ即ち惑溺にて、世に虚飾なるものの起る由縁」の悪習であり、文明（知性によって万民の幸福を追及する）の時代において、事物、制度、思想によってこの旧時代の惑溺を払拭すべきであると主張している[18]。

「惑溺」についてもまた、進化生物学的にその意味するところを考えると、所属メンバーが多く（少ない方が福澤いうところの「実」の効率が浸透しやすい）、

比較的メンバーの階層が維持されている（維持されていない場合は、「実」の効用が有利に使える）といった「怨望」が生じやすい集団構成において想起しやすいと想定できる。実際、心理学において思考のパターン化、いわゆる「心の慣性の法則」は広く知られている（あるものを選ぶと次に同じ傾向にあるものを選ぶ可能性が大きくなる）[19]。特に危急もしくは意識的でない限り、ヒトの行動は習慣に支配されがちであるといえるだろう。また、知性による「実の効用」の検証とは、近世、近代の文明時代という背景を取り外しては、存在し得ないものである。人類史を顧みるとその大部分が、多くの「惑溺」によって支配されてきたという観を呈している。つまり、反知性的な認識傾向が「惑溺」であるといえるだろう。

そういう意味では、「人間」は本質的に「怨望」を燃やしやすく、「惑溺」に浸りやすい非常に難儀な動物だといえる。しかし、この難儀な性向をただ嘆くだけでは、現実の歴史にそぐわない短慮であると考えている。その上にある知性、意志がその荒馬を乗りこなせるからこそ「人間」たりうると思うからである。

人間行動の物理的根拠は、神経科学的に「ヒト」の脳の構造に支配される。「感情」や「利己的傾向」といった点において機能する大脳辺縁系が、「意志」を司る前頭葉と神経回路的に結合するという他の動物には見られない特異的な神経回路により、感情や惰性的な認識（無意識領域）を言語化し意識化して理解することでき、そうして「意志」による制御を可能とする。これは精神医学の原則であり、「人間」の「大きな力」なのである。

このような視点が提供されるとき、福澤が指摘した人間観の2つの否定的観点はまさに時代を超越した先進的なものだと評価されるべきであろう。また、反集団的利己的感情「怨望」と反知性的認識「惑溺」と、これらに名を与え、注意を向けさせることで、無意識に「ヒト」として陥りやすい2つの重大な欠点を、意識的に「人間」として制御できることを未来に向けて福澤は祈ったのだと思う。

筆者は、「知性・意志」の「人間観」に、神経科学的、進化生物学的「ヒト」の性質を加えて、より現実的な「人間観」により、歴史や社会を見るべきだと考えている。福澤が150年近く前に見破った人間の奥底に潜む負の要

素が、近年の神経科学・進化生物学の発達により得られた知見と驚くべきことに一致している点において、福澤の思想が時を超えて生きている由縁をみたのである。

V　最後に

筆者の不見識のため、新奇といえるような福澤の人間観の一面を示すことは難しいと感じている。しかし近年の神経科学、進化生物学の進歩により「ヒト」と「人間」の間が少しずつでも近づいていること（自然科学と人文・社会科学が再びクロスしはじめたこと）、150年を隔てた世で出された科学の成果が、福澤の思想と一致する部分があることに感慨深いものを感じたため、拙文を投稿した次第である。駄文ではあるが、少しでも自然科学と人文・社会科学の交流の益となればと思う。

最後に福澤研究についてご教授いただいた法学部法律学科・岩谷十郎教授に深謝すると共に、しかしながら、本文の文責はすべて筆者にあることをここに明記したい。

文献

(1)　小泉信三『私の福澤諭吉』講談社（1992）

(2)　小泉信三『福澤諭吉』岩波書店（1966）

(3)　丸山眞男『「文明論之概略」を読む』岩波書店（1986）

(4)　安西敏三、岩谷十郎、森征一編著『福澤諭吉の法思想』慶應義塾大学出版会（2002）

(5)　坪川達也「社会行動と魚の脳」『日吉紀要自然科学』26（1999）、pp. 1-10

(6)　T. Tsubokawa et al., Pharmacological effects of diazepam on mirror approaching behavior and neurochemical aspects of the telencephalon in the fish, medaka (*Oryzias Latipes*), Social Neuroscience, submitting

(7)　坪川達也「意識――無意識から系統発生するもの――」『生物学史研究』78（2007）、pp. 43-55

(8)　坪川達也「感覚と欲求――魚の脳からヒトの脳まで」『身体医文化論Ⅰ「感覚と欲

望」』慶應義塾大学出版会（2002）、pp. 439-460
(9)　進化経済学会編『進化経済学とは何か』有斐閣（1998）
(10)　R. ドーキンス著、日高敏隆他訳『利己的な遺伝子（「生物――生存機械論」（1976）増補改題）』紀伊國屋書店（1991）
(11)　S. ピンカー著、椋田直子他訳『心の仕組み』日本放送出版協会（2003）
(12)　伊藤正雄『福澤諭吉論考』吉川弘文館（1969）
(13)　安西敏三『福澤諭吉と西欧思想』名古屋大学出版会（1995）
(14)　千種義人『福沢諭吉の社会思想』関東学園研究叢書 6（1993）
(15)　丸山眞男著、松沢弘陽編『福沢諭吉の哲学』岩波書店（2001）
(16)　坂本多加雄『新しい福沢諭吉』講談社（1997）
(17)　福沢諭吉『学問のすすめ』岩波書店（1942）
(18)　福沢諭吉著、松沢弘陽校注『文明論之概略』岩波書店（1995）
(19)　和田秀樹『痛快！心理学』集英社（2000）